令和４年度第１回北海道立帯広美術館協議会議事録

１　日　　時　　令和４年度（2022 年）６月 16 日（木）　13 時 30 分から 16 時 00 分まで

２　会　　場　　北海道立帯広美術館　講堂

３　出席委員　　吉田真弓（会長）、能戸貴英、石崎庸之、原田純子、土井裕子、柳田祐子、持田誠、大河原茂美、中村博明　計９名（欠席　加賀学、後藤眞美子、橋本雄大）

４　事 務 局　　野﨑弘幸（館長）、石黒千栄子（副館長）、齊藤千鶴子（学芸課長）、吉田昌代（総務課主査）

５　傍 聴 者　　なし

６　議　　事

（１）令和３年度事業の実施状況について
（２）令和３年度美術館評価（最終版）について
（３）令和４年度事業の運営計画について
（４）令和４年度美術館評価の目標指標について
（５）教育普及事業（帯広美術館オンラインアート教室事業）について
（６）協議・意見交換

７　協議・意見交換議事録

最初に前回話題になった事項に対する事務局からの説明及び欠席委員からの意見に対する事務局からの回答

委　員：帯広美術館オンラインアート教室は、年間何件ぐらい対応できるのか。リモート環境が整っている学校数、対応する学芸員数で実施回数に限度があると思うが、具体的な目標はあるのか。教育委員会へはもう周知しているのか。

事務局：これから早急に周知する。全道で実施するオンラインアート教室では、帯広美術館に希望がある４件全てに対応したい。帯広美術館独自のオンラインアート教室は、学校の希望を聞いてできるだけ対応したい。対象は十勝、釧路、根室、オホーツク管内の全ての公立小中高特別支援学校としている。展示室からのライブ配信は美術館の休館日（月曜日）又は閉館後の５時以降となり、学校にとっては時間が制約されるが、定時制高校は実施が可能である。配信には Zoom を使用するが、整備されていない学校で実施する場合は、学校の機器やシステムを借りる等個別の対応を考える。プログラムによってはデータを学校に配付することも可能である。これらの調整に多少の時間を要するが、より希望に添えるものにしたい。

委　員：帯広市内の学校では生徒はグーグルクラスルームを使用している。学校のパソコンを使

用し大型モニターに映してクラス全員で見ると、作品の細かいタッチ等の映像は見づらくなるため、やはり生徒の端末で直接見られる方がよい。学校から機材を貸し出すことは可能である。

委　員：オンライン事業を実施するには著作権の問題をクリアしなければならないが、どのようになっているのか。

事務局：「授業目的公衆送信補償金規程」により、規定の料金を払わなければならない。加えて美術作品を二次的に使用する場合は、著作権の確認をしなければならないため、制約があることは確かである。

委　員：映像をオンライン配信できるのであれば、学校の授業だけでなく全ての人にという意見もあると思うが、できること、できないことをはっきりさせてから事業を始めた方が良いのではないか。

委　員：「美術館探検」プログラムは美術作品ではなく仕事の紹介でありおもしろいと思う。美術館や水族館などの裏側を見られる番組があるが、裏側を見ることで関心が高まる。CD などでデータを配付することは有効だと思う。

委　員：喫茶コーナーを利用したことがあるが、カフェ空間としてとてもよかった。参考意見だが、アーティスティックな食器を導入したらどうか。地元の作家や寄贈してくれる方がいるのではないか。

オンラインの「美術館探検」はおもしろそうで興味深い。

委　員：喫茶コーナーはボランティアが運営しているが、食器は開館当初 30 年前にそろえた物である。十勝管内の作家やボランティア会員の作品の使用について検討する価値はあると思う。協議会でアドバイスをいただいたことを実現させている例も多くあるので、ボランティア全体で検討したい。

委　員：コレクションの稼働率は 10%程度で推移しているが、オンラインアート教室により公開することで、表に出にくいコレクションを有効に活用できるのではないか。今年から高校の地理が必修科目となった。現在の特別展「アートの中の風景」は、地理学的に見てもおもしろいので学校でも活用できる。

社会教育の目的は、人間の発達段階に応じて求めに応じた学習ができるということである。事業を学校に絞るとそれ以上に広がらないためもったいない。クリアしなければならない問題があるが試験段階と捉え、将来発展的に活用できるよう前向きに進めてほしい。

オンラインアート教室は美術館評価のどの項目に該当するのか。「学校教育活動の状況」か「コレクションの稼働率」か、あるいは来年度からの新しい評価制度の項目に新設してもいいと思うので検討してほしい。

事務局：「学校教育活動への対応数」、「コレクションの稼働率」、「教育普及プログラムの実施数・満足度」に反映できると考える。今年度は既存の評価項目の中に反映させるが、来年度以降の新しい評価制度で項目を設置する可能性もある。

委　員：美術館評価項目「保管状況の適切さ」とあるが、今年度の具体的な計画や収蔵作品の措置を行う数値目標があるのか。収蔵庫の環境状況、作品保管上の課題を明らかにした上で解決の方向性が見えるといいのだが。

事務局：今年度新しく収蔵する作品は決まっていないが、既存作品を適切に保管するため定期的な清掃などの環境整備は引き続き行っていく。修復についても今年度はまだ目途が立っていない。修復が必要な作品はあるが、全体の状況を見ながら計画的に進める。額装についても進めていく予定。

現在１つの収蔵庫に様々なジャンルの作品を保管している。清掃、温湿度の管理により作品の損壊を防ぐよう努めている。

委　員：図書コーナーの利用件数はどのように数えているのか。利用者件数の評価をどのように考えるか。

事務局：目視で利用者数を数えている。昨年、一昨年はコロナ感染対策として休止していたため評価を実施していないため、前年度比で評価するしかない。

委　員：調査・研究の充実度については、定性評価以外は難しい。博物館法が改正され美術館に求められる役割が拡張される。学芸員数が変わらない中で業務が多様化し、事業計画を立てることが厳しくなってくる。事業の取捨選択も考えられる。

委　員：子どもの来館が少ないと感じる。どのようにしたら興味を持ってもらえるか。QR コードを利用しスマホなどで情報を得られるようなことができないか。手段は問わないがユーモアのある視点で展覧会や展示作品に関連する情報発信ができないか。

子ども達は興味のあることに対してどんどん質問してくる。オンライン授業でも子どもに興味を持ってもらう工夫が必要である。

事務局：子ども向けにはクイズを行っているが旧式な方法かもしれない。スマートホンなどを利用し、奥に広がりのある情報を配信することも、今後の美術館活動の視野に入れる必要あると考える。新たに情報発信するシステムを導入するには課題が多いが方法の方向性としては必要がある。子ども達とつながり一人一人の声を聞けるということもオンライン教室のメリットである。どんな質問にも答えられるよう準備を進めていく。

委　員：オンラインアート教室は学校だけでなく一般市民も見られたら良いと思う。

事務局：オンラインアート教室とは別に「リモート・ミュージアム」を一般市民向けに動画配信を行っている。今年度は次回のコレクション・ギャラリー及び４回目の特別展で製作する予定であり、ホームページから誰でも見ることができる。

委　員：美術館に小中学生の作品を展示できないか。絵を描く子にとっては美術館に飾られることは励みになる。親子、家族で美術館を訪れる機会も増えるのではないか。

事務局：展覧会として展示室に子ども達の作品を展示するのは難しいが、展覧会の関連事業というかたちでロビー等のスペースを使用して展示することは可能である。工事等による長期休館中を利用してそのような場を作ることも検討できる。

委　員：オンラインアート教室に期待する。周知には校長会も協力できる。
学校では美術の授業時数が削減され、時間を割くことが難しくなってきているが、美術部と連携できないか。イベントがあるとやりがいを持って活動できるし、部活だとある程度時間が自由に使える。当校を使って試行することもできる。
美術教科以外では総合的な学習の時間で「美術館探検」が活用できそうだ。帯広市では「帯広市民学」として実施している。基本的な計画は帯広市教育委員会が作成しているが、オプションで学校の課題に取り組むことができる。市教委と連携し、市民学のアート部門として実施できるのではないか。

委　員：出張アート教室は作品実物を貸し出す事業だったが、なぜオンラインに移行したのか。
事務局：道の方針としてオンラインに移行している。一つの作品を移動させる予算、労力、時間、一度に参加できる生徒数などを考えると、オンラインのメリットを重視した移行ではないか。
委　員：オンラインは有効であるが、やはり実物である。できれば併用が望ましい。
学校だけではなく生涯学習の場での活用にも目を向けてほしい。

委　員：昨年度の展覧会では「水木しげる展」の観覧者数が圧倒的に多い。他の展覧会も広報量が同じであれば観覧者数も同数になったのか。
事務局：展覧会の内容、作品によって集客率は違うが、同じような内容でも周知・広報によって集客率に差が出ることもある。「水木しげる展」は帯広・十勝管内の主要メディアがタッグを組んで協力してくれた。地元住民への広報、全道規模での広報、テレビ番組の放送などによりその効果があった。